

平成27年度 弘前大学グローバル人材育成事業学生市民等協働プログラム報告書
台湾視察を踏まえた弘前市における農村交流観光振興方策の検討

弘前大学農学生命科学部 藤崎 浩幸 fusa@hirosaki-u.ac.jp

1. 背景と目的

弘前市は台湾へのリンゴ販売拡大に力を入れており、台南市などと相互交流を促進している。また、弘前市における農家体験受入れのための農業者の組織である弘前里山ツーリズムにおいて、近年、台湾からの受入れ客が増加している。そして、台湾においてはレジャー農業が盛んである。

これらを踏まえ、弘前における農村交流観光振興、弘前里山ツーリズムにおける台湾からの受入れ客拡大を目指すため、学生・市民・企業が協働で台湾の風土に触れ、台湾の農村交流観光産業・施策を調査し、また弘前への来訪者の現地を訪問することにする。そして、これらを通じ、学生・市民・企業それぞれが個々のレベルアップを図る。

2. 参加者：市民3名・学生3名・教員1名

弘前里山ツーリズム：平井 秀樹 会長、村上 岩男 副会長、西谷 雷佐 事務局

学生：14A5017 須藤 翔平、14A5022 戸田 陸斗、14A5023 中村 紗有

教員：藤崎 浩幸

3. 行程と対応者

○3月5日(土)

・弘前→台北

○3月6日(日)

・台北→台南

*台南市街地内 食品売場

・新光三越西門店



• 台南市農會超市、台南市農會假日農市



* 大坑休閒農場 視察・泊 蔡澄文 場長、他



○3月7日(月)

* 台灣嘉南農田水利會、烏山頭水庫風景區



○3月8日(火) 台南市内、台南県

*9:30-11:00 黎明高級中學

羅 家強 校長、黃 慧敏 董事會秘書・国際教育中心主任、他



*新營市街地散策



*14:00-15:30 台南市政府民治市政中心

李 建裕 専門委員及び議会連絡官 (弘前里山で民泊経験あり)

吳 俊傑 農産行銷科科长、吳 威達 農會輔導科科长

徐 正樺 政府新聞及国際関係處 (日本語可能)



*仙湖農場 泊 吳 森富 創辦人、他



○3月9日(水)

*仙湖農場 視察

・台南→台北

○3月10日(木)

・台北→弘前

4. 学生報告書

(1) 14A5017 須藤 翔平

1) 各内容の感想

a. 黎明高級中学訪問(3/8)

当中学校では、教員の方々から黎明高級中学から短期留学の一環として弘前の農家民宿での農業体験を実施していることの説明や、台湾の漢方にちなんだ土産物として知られている「八仙果」と呼ばれる、のど飴のようなものの成形作業を実際に体験しました。晚白柚というザボンの一品種の中をくり抜いて、その中に、陳皮(チンピ)、半夏(ハンゲ)、茯苓(ブクリョウ)、薄荷(ハッカ)などの漢方を入れて乾燥させたものを包丁で切りながら四角形の一口大にするのですが、均一にすることが私にはなかなか困難なものでした。

また、黎明高級中学の学生の方々とバスケットボールによるレクリエーションによる交流を通して言語以外のコミュニケーションを取ることができた、と言う経験は貴重なものとして自己の自信に繋がりました。

b. 台南市政府訪問(3/8)

台南市のレジャーファームに関して、政府への申請によって登録される休閒農業区では主に宿泊農業が実施されており弘前市で行われている里山ツーリズムの様なものが台南市には存在していないことや、休閒農業区のメリットとしては観光客が来ることによる収入の増加、建物の誘致を容易にすることなどが挙げられました。

台南市政府では弘前市と台南市の関係性について、市同士の交流だけではなく市民同士での交流が重要で弘前、台南市民がどのような考えを持っているかを把握することが課題である、との見解を受けて私は弘前市と台南市のレジャーファーム、観光農業に対する観点の違いを理解し互いの事業において吸収できる部分を自身の

活動に取り入れることが重要だと考えました。

c. 大坑休閒農場(3/6-7)

大坑休閒農場は、日本の農場と比較すると放し飼いにされている烏骨鶏や、ウサギやヤギ、豚など様々な動物が飼育されていることの他にも、スパやアスレチック、バーなどが設置されていることから観光施設としての要素が強く感じられました。

農場の施設の大半は自己出資で建設されており、家族経営が主となっていて私達に対してとても親切にいただきました。また、農場での夕食に出された料理は実際に農場で飼育されている家畜だった点では農場らしさを感じました。

気になった点としては展望台までの道の舗装状態、安全性においては日本の観光施設の安全基準では危険だと判定されるのではないかと疑問に感じました。

d. 仙湖農場(3/8-9)

仙湖農場はもともとリュウガンが山一帯で収穫することができた土地を、農場のオーナーがリュウガンの栽培によって山一帯を買い占めることによって農場の土地の準備、施設の設立のための資金源としていました。実際にリュウガンの燻製の工程の説明や、日本に輸出されるリュウガンはほとんどのものがタイ産で台湾産のものはないことなどを知りました。

農場のスタッフで日本語学校に通っていた方がおられたのですが、日本語を学ぶきっかけが日本のドラマだったと言うお話を伺い改めて日本と台湾の関係性が近いものであることや親日性を実感しました。

e. 台湾市民生活状況(台北夜店散策(3/5)、新光三越台南西門店・台南市農會超市・台南市農會假日農市(3/6)、台南市街地散策(3/7)、新營市街地散策(3/8)、台湾での食事)

台湾では自炊をせず屋台などで外食する文化らしく、台北の夜市散策では午前0時を過ぎても大人、子供を問わず多くの人々が夜店で食事をしている光景は日本では見ることのなかったものでした。

台湾での食事は、大抵の料理に五香粉と呼ばれる桂皮(シナモン)、丁香(クローブ)、花椒(カホクザンショウ)、小茴(フェネル、ウイキョウ)、大茴(八角、スターアニス)、陳皮(チンピ)などの粉末をまぜて作られる調味料が使われており、独特の風味を感じました。

f. 台湾嘉南農田水利會・烏山頭水庫風景區

嘉南農田水利會では農業水利事業を管理するために灌漑システムについて部署が分かれていることや、烏山頭ダムについて、八田與一という日本人が台湾で初めてセミハイドロリックフィル工法を用いて建設し当初は50年の運用を目標としていたが現在80年以上運用しており台湾人に愛されているダムであることを知りました。

また、このようなダムの周辺の地区にはレジャー施設などの観光地化がなされており、その収益は水利事業の財源に当てているとのことでした。

八田氏はこの他にも1年目には稲を栽培し、2年目にはあまり水を必要としないサトウキビ、そして3年目には水をまったく必要としない雑穀類の栽培をするという3年輪作法を提唱し、これにより当時5万haの齒科灌漑できなかった耕地を15

万 ha まで灌漑する事が可能になりました。このことから八田與一の台湾への計り知れない貢献が伺えます。

2) 全体を通じて、今後の弘前市の農村交流観光振興、弘前里山ツーリズムの方向性などに関して考えたこと

今後の弘前里山ツーリズムの方向性について、農作業の体験だけではなく農村の風景などの観光による「レジャー」、「癒やし」の概念をより強く押し出していくことが課題であるように感じられました。私達が普段何気なく見ている光景が都会の人々にとってはそれだけで価値のあるものである可能性が存在し、何もしなくともただ農村でゆったりとした時間を過ごし農作物を味わい、農家の人々との会話を楽しむといったことも大切なのではないのでしょうか？

農村の観光地としての価値を高めていくためには、農村における観光事業の多様性が重視されるのではないかと私は考えます。

参考、引用) <http://ishigami89.com/kanpougai.html>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%94%E9%A6%99%E7%B2%89>

(2) 14A5022 戸田 陸斗

1) 各内容の感想

a. 黎明高級中学校を訪問してみて、日本の中学校との類似点・相違点があると感じられた。まず類似点として、行われている行事などは大体一緒であることである。しかしその一方相違点として、歓迎の動画を見てそれぞれの行事の規模は日本よりも大きいような印象を受けた。また校舎自体も規模が大きく、コンビニがあつたりやバスケットゴールがいくつも設置されたりしているのを見たときにはかなり驚いた。

海外研修・留学にも活発に取り組んでいて、イギリスやフィリピン、日本(弘前市など)などへの留学・研修を行っているようだが、大体は短期のものが多くという。このことに関してなぜ日本、その中でも東京や京都などの観光都市ではなく、なぜ弘前なのかという疑問について、現地に送られた人を通じてリンゴが有名であることを知り、そこから交流(農業体験)が活発になった。

b. 台南市政府で伺った話で一番印象を受けたことは、2・3日目、4・5日目に訪れた大坑休閒農場と仙湖農場は政府から少額の補助金をもらってはいるがほとんどは自らのお金でそれぞれの施設を作ったということだ。また輸出入に関して、日本がどちらも上位3位以内に入っている話から日本との交流の多さも感じられた。その他に、農業政策として「新農人」として45歳以下の応募から招集した人々への教育なども行っていることに対しても日本でも生かせるのではないかと考えた。

c. 大坑休閒農場を訪れて初めに抱いた印象として、農場の雰囲気はあまりせず、スパやカフェ、いくつものコテージがありどちらかというとリゾートに近い印象であった。だがその中にも鶏やヤギが飼われていたり、この農場に来る道中の脇でタケノコが栽培されていたり農場を感じさせる部分もあった。また朝晩の食事でも農場でとれた豆や飼っている鳥などを料理に使用しているところからも農場を感じさせられた。

また言葉もなかなか通じない中でもこの農場で働いている人たちの人の好き・優しさ・接しやすさ・従業員同士の信頼などがとても感じられた。

レジャー農業としてこちらでは観光という柱があってその周りに農業が支えているような印象だった。

- d. 仙湖農場でも大坑休閒農場と同様、景観は農場というよりリゾート的な雰囲気であった。またこちらの農場の人々もとても人柄がよく、好印象であった。

こちらの農場で一番印象的なのはやはり「竜眼」である。生まれた初めて見た実であったが見た目、味ともにレーズンのような感じで、収穫の時期は7月下旬から8月にかけてで、収穫の方法としては24時間木に実のついた状態で乾燥させ、6日ほど乾燥(3分の1ほどの重さになる)、そこから実の皮むき作業(ここでまた3分の一ほどの重さになる)という手順である。

- e. 台湾の生活風景として、まず初日に訪れた台北夜市では休日であるからかもしれないが、大変込み合っていて観光客だけでなく地元の人々の方も多かった印象だった。また、10時近くでも子供たちが普通に遊んでおり、日本では考えられない光景であると思った。

2日目に訪れた三越では日本食、日本から輸入された食材も多くみられた。その中に青森県産のリンゴジュース、それで作られたアイスなども売られており青森県産のリンゴの知名度の高さがわかった。同日訪れた農會超市などは新鮮な野菜などが売られており日本の直売所に似た風景であった。

全体を通しての台湾市街の探索から感じたことは、それぞれの店の自己主張の強さである。とにかく歩いてみると看板が多い印象だった。とりあえず人の目に留めることは大事なことである。ここが比較的小となしい日本人との違いであると思った。また飲食店に関して店の前の歩道にもテーブルを置いている光景が多くみられた。スペースをうまく使っていると思った一方、ここにも自己主張の強さを感じられた。食事に関しては似た香辛料を使っているからか、最初はおいしく食べていたが、その反面飽きも生じてしまった。

- f. 台湾嘉南農田水利會では、主に農業水利事業の推進のため高付加農業の推進、水質汚染防止、緑化活動、日々の水利施設の更新工事などの事業が行われてきた。農家が自身で農地を管理しているのではなく、この団体が管理しているという話を聞き、日本ではそういった話を聞いたことがなく驚いた。またダム付近にプールやバーベキュー施設などを作るなどダムと観光を結び付けていることも知り、参考になった。

烏山頭ダムは日本から来た八田與一の指導のもと作られ、世界で唯一となるセミ・ハイドロリックダムとして知られている。生態系破壊を防止するために釣りはもちろん遊覧船なども通っていない。近くにあるシャンゼリゼ通りには日本から送られた南洋桜が植えられていて、やはりいろいろなところで日本とのつながりを感じた。

2) 全体を通じて

弘前の農家での農村交流と台湾のレジャー農場での交流を比べてみて、大きく違っているという印象を受けた。その違いとしてやはり、弘前の実際に農業体験してもら

うような農業が基準としているか、台湾のように見て楽しみ、リラックスしてもらうことが目的であるように、観光が基準としているかという違いである。実際に台湾でのレジャー農場での体験を受けての私の考えとして、こちらのやり方を崩さず強みを押していくことに力を注いでいく方がいいと思った。私は弘前で実際に農家に泊まるという体験をしたことがなく、あくまでも調べた中での話になるが、こちらの強みとしてはやはり農業体験ができること、農家の人と同じ屋根の下で泊まることで得られる親近感やコミュニケーションであると考え、この強みを活かせる体験（例えばその地域特有の祭りへの参加など）をいろいろ考えていくのがこれからの課題であると思った。

(3) 14A5023 中村 紗有

1) 各内容の感想

a. 黎明高級中学訪問

中学校の行事の様子をスライドショーで見たり、校内や授業の様子を見た。先生や生徒の様子から弘前里山との交流は貴重な体験になっていると感じた。里山に来た生徒が身近に農業を感じ、農村の暮らしを体験できることは台南市の農業にも関心をもついい機会になると思う。

b. 台南市政府訪問

市の農業の現状について主要果物の生産と貿易や農業政策について教えていただいた。日本と同様に、生産者の高齢化と耕作放棄地の増加が課題となっており、45歳以下の新規の農家に技術や経営の指導をし、農村再生や地域の特色を生かした農業の発展で農村の活性化を目指している。また、民間団体の休閒農場へ専門家が視察したり、休閒農業区をつくることで観光客と収入の増加に取り組んでいる。日本への輸出による交流で農業技術の向上につなげたいとおっしゃっていたので、農村同士の交流もっと盛んにおこなわれるような環境をつくることも大事だと思った。

c. 大坑休閒農場

大坑農場は市の支援はなく自分たちのお金で切り開いたレジャー施設で、民宿以外に動物とのふれあいやアスレチックなどで観光客を集めている。年間5万人の観光客はリピーターが多い。農場のオーナーにあこがれてレジャー農業を始める人も多い。山道の安全性など気になるころはあったが、規模の大きさはすごいと思った。経営している家族全員が楽しんでやっていることが印象的だった。

d. 仙湖農場

地元の人も娯楽を求めて仙湖農場を訪れる。農業体験は季節によって異なる体験ができ、宿泊施設は地域にある昔からの形にこだわっていた。経営者や従業員がこの地域の環境や伝統的な暮らしを守り、伝えるために誇りをもって働いていることに感心した。経営する家族の息子は父を手助けするために働き、この暮らしを守るために今後どうすべきか考えていて素晴らしい人だった。父親も夜中まで畑などの見回りをしているが、それが当たり前のように話していて農場の仕事を楽しんでいることが分かった。

e. 台湾市民生活状況

台北の夜市は屋台の数が多く衛生面が気になったが、たくさんの人でにぎわっていた。夜11時でも小さい子供が歩いている、日本では考えられない光景だった。入口のドアがない店が多くどの店でも楽しめる雰囲気だった。移動の途中に寄った三越は日本と同じようなデパートで、日本製の商品が所々に売られており、日本産のりんごやリンゴジュースは高値で貴重なものだとわかった。農會假日農市は日本にない野菜や果物が売られていて、小学生くらいの子どもも店頭に立って商品売っている姿があった。市街地の散策で入ったスーパーでも日本製のものが売られていて、りんごのほかに味噌やお酒などがあり台湾製の倍以上の値段で売られているものもあった。日本製は安全で安心なものとして売られていたと思う。食事は独特な香辛料に慣れなかったが、初めて食べるものばかりで楽しかった。日本人向けの味の店もあり、観光で来るにはいいと思う。バイクや乗用車の通行は危険で海外感を感じることができた。

f. 台湾嘉南農田水利者會・烏山頭水庫風景區

日本人の八田與一によって嘉南地域の灌漑事業が発展し、台湾最大の土地改良区へとつながった。11月から3月まで水不足になるため、36のダムなどの灌漑施設が建設された。灌漑施設の費用は政府と農民が折半している。また、水不足の対策に3年の輪作で農業をしている。台湾の土地改良区は水田から管理をし、限られた場所で事業を展開しツーリズムをしている。烏山頭ダムの公園などのレジャー施設の運営も土地改良区がしている。日本の土地改良区との違いがわかり、嘉南地区の八田さんに対する尊敬や感謝の心が今も続いていることに感心した。

2) 全体を通じて、今後の弘前市の農村交流観光振興、弘前里山ツーリズムの方向性に関して考えたこと

視察した2つの農場では地元の人でも観光にくるような場所だったので、普段農業に接することのない人びとに農業体験や昔ながらの生活の体験をさせること以外に気分転換になるような娯楽や観光スポットを見つけることが大切だと思った。弘前ならではの農村ならではの特徴を見つけて観光に生かすため、他都道府県の人に農村の暮らしを体験させ特徴を見つけることが必要だと思った。りんご以外の農産物や工芸品などを海外に紹介し日本に興味を持ってもらい、日本語がわからなくても大丈夫だということを知ってもらおうとホームステイに来る人が増えると思う。